

極域・寒冷域研究連絡会のご案内

「極域・寒冷域研究連絡会」は1989年に「極域研究連絡会」として気象学会内の研究連絡会第1号として発足し、これまで極域の大気・雪氷圏に関する研究発表、研究・観測計画の立案の場として運営されて来ました。更に本年度からは「極域・寒冷域研究連絡会」と名称を改め、既存の研究領域に加えて広く寒冷域をも含めて扱い、より活発な活動を予定しております。

今回は、1997年度の気象学会春季大会に合わせ、大会期間中に筑波で行なう予定です。今回は「国際北極研究センターへの展望」と題して、今年度後半からアラスカのフェアバンクスに発足する同センター設立の経緯、今後のサイエンスプランなどについて、北海道大学池田元美教授による説明会を企画しております。その要旨を末尾に添付いたしました。多くの皆様への参加を期待しております。

現時点では、大会終了直後（5月23日夕方）に大会会場にて行くことを計画しておりますが、時間・会場等の詳細は後日改めて連絡いたします。

担当世話役（所属）[TEL；E-mail]

浮田甚郎（宇宙開発事業団）

[03-3224-7096；qpee@eorc.nasda.go.jp]

中村 尚（東京大学理学部）

[03-3812-2111 ext. 4285；hisashi@geoph.s.u-tokyo.ac.jp]

高田久美子（国際農林水産業研究センター）

[0298-38-6354；takata@jircas.affrc.go.jp]

阿部彩子（東京大学気候システム研究センター）

[03-5453-3955；abeouchi@ccsr.u-tokyo.ac.jp]

平沢尚彦（国立極地研究所・南極越冬中）

[03-3962-5904；hira@nipr.ac.jp]

「国際北極研究センター」構築へ向けて

北海道大学大学院地球環境科学研究科 池田元美
国際北極研究センター設立に向けた会議が1月にシアトルで開かれました。私はこれに出席し、日本側のコンタクト・ポイントになりました。このフェアバンクス（アラスカ）に開設されるセンターには、アメリカ側に加えて、日本から海洋科学技術センター、宇宙開発事業団、そして科学技術庁主導のフロンティアがはいり、それぞれ海洋観測、リモート・センシング、モデリングを中心に役割分担をすることになっています。

以下に添付する日米間で交された（当面の）合意内容をご覧になると、どのような分野の研究が期待され

ているかわかることと思います。この中で特に海洋・海水と大気海洋相互作用に重点をおいて、9年度に10人の研究者、その後毎年10人ずつ増やしていき、11年度からは30人体制でセンターを運営していく計画です。この人数には日本人研究者を兼任で送る場合、また外国人研究者をポスト・ドクターや客員研究員として迎える場合をすべて含んでいます。今後のスケジュールとしては、今年5月に日米のワークショップを開き、研究計画を作り上げていくことがありますし、10月にはセンターをオープンする予定です。

設置目的

1. 全球的気候変動に果たす北極域の役割を解明する。
2. 全球的気候変動における北極域へのインパクトを予測する。
3. 北極域に特有な地球環境変動の機構を明らかにする。
4. 日本・米国および全世界において遂行される北極研究を支援し、またその一つの中核を担う。
5. 極域研究を担う次代の研究者を育成する。

研究グループ

1. 海水・海洋結合系
2. 大気・海水・海洋の相互作用
3. 海洋生物生産を含む海洋中の物質循環
4. 水循環（永久凍土、陸域植生）
5. 大気化学成分と大気循環の相互作用
6. 古環境復元（氷床コア・海底コア）
7. 生態系（森林火災など）
8. 固体地球

運営のポリシー

運営に関しては、より多くの方の意見を聞けるように、以下のようなポリシーを設けるよう努力します。

1. 各分野の専門家に広く意見を求める。（形式的ではない実質的な計画会議、シンポジウムにおける成果発表を行う。気象学会、海洋学会の大会などでスペシャル・セッションを設け、意見を求める。）
2. チーム・メンバー（ポスト・ドクターも含めて）を公募で集める。
3. サバティカル研究者を積極的に受け入れる。
4. 研究しながら学位を取得できるシステムを設ける。
5. 現地でシステム・エンジニア、プログラマーなどを雇用し、質の高い労働力を確保する。